4　「仲間意識」と公共心の関係

「愛」「和合」「共感性」は、三角形のように常にバランスを取りつつ共存しているもので、どれか一つでも欠けてくると、他の二つも崩れてしまいます。思いやりのない人が周りと足並みをそろえたり、人にされたらイヤなことをしないでいられるでしょうか？　周りと足並みをそろえられないと、人にされたらイヤなことをしていることにも気付かず、思いやりのない行動を取ってしまうことでしょう。ケンカやイジメも、そのほとんどが「仲間意識」の欠如から発生しているといえます。「仲間意識」を失うということは、思いやりを持たず（持てず）、周りと足並みをそろえようとせず（そろえられず）、人にされたらイヤなことをしている状態であり、その程度によっては「犯罪」に発展してしまいます。犯罪者には、「仲間意識」というものが欠如しています。思いやりのある犯罪者、周りと足並みをそろえられる犯罪者、人にされたらイヤなことをしない犯罪者……考えられますか？　思いやりがないから周りとの足並みもそろえられず、人にされたらイヤなことを（平気で）することができるのではないでしょうか。

犯罪とまではいかないものの、周りに迷惑をかけていることに気がつかない人も多くなってきました。私が親しくさせていただいている教育カウンセラーの方から、以前こんなメールをもらったことがあります。

心ない一言に傷つくのは大人も子供も一緒のはずなのに、最近の生徒や学生たちは、自分たちの傷つきやすさは棚にあげて、大人に暴言を叶きすぎのところがあります。私は現在、教育相談の仕事の他、予備校で英語と小論文を教えていますが、そこでのお客様気分の予備校生たちのわがまま勝手は大変なものです。毎時間ごとに授業アンケート

を書くのですが、毎回暴言の矢玉を突きつけられている同僚の常勤講師の先生などノイローゼ気味になっています。特に、授業の内容そのものとは関係ないようなこと（髪型や服のセンス、容姿など）で、ひどいことを書かれているらしく（「きもい*」、この世から消えた方が人類のため」など）、私も時々見せてもらいますが、本当に節操がないというか、垂れ流し的に何を書いても許される、人の気持ちなどお構いなし、といった世相が伺えます。

＊「きもい」とは、「気持ち悪い」を意味する若者言葉。

私も毎年、決まった時期（夏休み前や学年末）に講義アンケートを学生から提出してもらうのですが、そこにも同様の傾向が見られます。私の講義の悪い点（改善すべき点）を指摘してくれることは大変ありがたいことなのですが、表現の仕方を知らないのか、自分が言われているわけではないから実感できないのか、ものすごくキツイ言葉を投げかけてくる学生もいて、落ち込んでしまうこともあります。ましてや、先ほどの例と同様に講義内容とはまったく関係ないことを書いてきたり、「講義時間は、遅く始まり早く終わった方がよい」「授業だけして、学生への注意はするな！」など、要するに「お前の話など聞きたくない」「単位だけ出してくれたらいい」といったような内容のものが提出されることもあります。

それなのに、この世から消えた方がいい人に、話を聞きたくない人に、単位をもらおうとしたり、大学合格の手助けを求めたりするのは、身勝手な行動としか言いようがありません。どういう表現をすれば相手を傷つけることなく自分の意見が伝わるのか、そういうことを考慮することなく、ストレートな表現で出されてくる意見は、鋭い刃のように心を切りつけているようでもあります。まさに「垂れ流し」です。

近年、「公的－私的」「集団的－個人的」「自由－非自由」の選択（区別）のできない人が増加しているようです。こういう人たちは自分にとって都合の良い（居心地の良い）状態を選択して（つなぎ合わせて）、できるだけ努力せずに快楽を得ようとしたがります。

私の手元に今、二〇〇一年一月の新聞があります。そこには、

成人式の私語に憤慨　市長、式辞放り出す（一月七日）
「静かにしろ」「出ていけ」橋本・高知県知事（一月九日）
成人式クラッカー　男性5人を告訴（一月一一日）
成人式妨害5人逮捕（一月一二日）

いずれも読売新聞朝刊より。

もうおわかりだと思いますが、二千年紀に入る頃から「成人式」のあり方――とりわけ成人の行動が問題視され始めた頃の新聞記事です。成人式での新成人のマナーが低下し、会場内での私語が絶えず、携帯電話の使用もやめようとしない、祝辞を述べている来賓にヤジを飛ばすといったような有様を、新聞では「無軌道ぶり」と表現していました。この「無軌道ぶり」とは、まさに「愛」「和合」「共感性」の失われた状態であると言えるでしょう。来賓の方々の話が長いとか、つまらないとか、新成人がそう思うのもわからないでもありません。しかし、もう子供ではないのですから、新成人たちも来賓の方々の「愛」ある祝辞をありがたく受け止め、足並みをそろえ、自分がされたら（言われたら）イヤなことを避ける努力をするべきだったと思うのです。別の表現をすれば、「我慢」が足りない……その会場で何を期待されているのか、何をすればよいのかを考えようとする気持ちさえ喪失しているように見受けられます。

成人式に限らず、街中でも「無軌道ぶり」が目立ってきたように思います。例えば電車内、周りの乗客への迷惑も考えず大声でのおしゃべりを楽しむ若者たちがいます。夜の車内でも、

仕事の疲れから軽い睡眠を取ろうとしているサラリーマンの迷惑そうな顔などお構いなしに、おしゃべりを楽しんでいます。まるで、学校の教室を電車内に丸ごと移し替えたような有様です。友達とのおしゃべりは楽しいと思いますが、電車内では他の乗客にも気を配る努力をするべきだと思います。ところが、自分たちが睡眠を取ろうとしている時に別の若者のおしゃべりが聞こえてくると、「あの子たち、うるさいよねぇ」と恨めしそうに訴えている……。人には努力を期待し、自分たちはありのままの感情を「垂れ流し」ているのです。

車両から車両へと移動する際、連結部の扉を開けたまま閉めようとしない人も日に日に増えているようです。これは特殊な例かもしれませんが、車内のトイレから出てきたある若者は、そのドアさえ閉めもせず、仲間の待つ席に平然と戻っていきました。そんな彼らでも、きっと自宅ではキチンと戸締まりをしているのでしょう。もしかすると、誰かが自宅の玄関を開け放したままにしておくと「ちゃんと閉めろよ！」などと文句を言うのかもしれません。

駅のホームでキチンと列に並んで電車を待っている人がいる一方で、割り込み（横入り）を平然としてくる人もいます。そういう人の大半は、自分がキチンと列に並んでいる時に割り込んでくる人に対してクレームをつけたがるものです。

デパートや駅などにある階段に座り込んでいる若者も目立ちます。人が通りにくそうにし

ていても、彼らは道をあけてあげようという素振りさえしません。逆に、そこに自分たちが座る権利を通行人によって侵そうとしているといったような、そんな目でにらみ返してくることさえあります。

往来でセキやクシャミをする時、口に手を当てる人が少なくなっています。これが子供であれば、親の躾にも問題があるのかもしれないと言えるのですが、平気でゴホゴホ、ハクシュンとやるのは子供だけではありません。老若男女を問わない状態です。周りの人に唾液の飛沫がかかるだろうに、そんなことはお構いなしといった感じです。

子供の頃、私は「周りの人に気を配りなさい」「人に迷惑をかけないようにしなさい」と親から躾を受けてきました。いつも周りの人たちと「仲間意識」を持つ――とにかく「愛」「和合」「共感性」を意識しながら生活するよう言いつけられたと、そう言い換えることもできます。このような「仲間意識」という規制を子供の頃から受け続けてきたのは、決して私だけではないはずです。

「仲間意識」というのは、「お互いに迷惑をかけないようにしよう」という気持ちからも芽生えてくると思います。このような意識は、公共心にも発展していきます。公共心というのは、自分の利益を守るけれど、それと同じくらい、またはそれ以上に社会の利益や秩序を守ろうとする気持ちのことです。前にもいろいろ述べてきたのでもうおわかりかと思いますが、公共心を保つことが自分の利益や評価を高めることにつながるのです。「情けは人のためならず」というのは、まさにこの公共心の具現化です。

私たち人間は、自分の利益だけを追求していたのでは、仲間はずれになってしまうだけではなく、もっととんでもない事態に陥ってしまう弱い存在です。これは人間だけでなく、国家間にも言えることだと思います。国際的な「愛」「和合」「共感性」を失えば、当然その国家は孤立してしまいます。かといって、「仲間意識」に固執してしまうと自分らしさを失ってしまうことになりかねません。

ただ、「仲間意識」を失うということが何を意味するのか、根本的なことですが私たちは人間の本質を忘れてしまっているように思います。